

ビバハウス便り NO.86 天界の異常と人間界の異常には関連があるのか？

ビバハウス責任者 安達 俊子

今年ほど、厳しい猛暑で、その上、残暑が長引いた年はない。連日、新聞、ラジオ、テレビで、熱中症にかかった方、亡くなった方の事が報じられ、熱中症への注意が呼びかけられ続けた。

10月に入って、朝夕の温度差が大きくなって、秋の訪れを肌で感じながら、ビバハウスの庭を見渡しびっくり！春に咲き終わったはずの、つつじやレンギョが二度咲きしているではありませんか！！私は信じられずに目をパチクリ。今年为天候の異常さを改めて知った出来事でした。今日20日付の道新にも、小樽で「慌て者のシャクナゲ」が季節はずれの花を咲かせ、皆をびっくりさせているとの記事も出た。

まるでこの自然界の異常に負けないぞとでも言うかの様に、人間界の異常も止まる所を知らない。親が子を殺し、子が親を殺す。親が子を虐待し、子は親に暴力で報復する。『暴力を受けて育った子は、必ず暴力で仕返しをする！』まさにこの命題どおりの若者たちにこの夏は何件も遭遇した。その一部を、今年2012年は、国連で定めた『国際協同組合同年』ということで開催された、ワーカーズコープ・センター事業団主導の『2012年共同集会 in 北海道』の第8分科会のパネリストとして報告させて頂いた。

集会全体のメインテーマは、『共同で地域をつむぐ～人として生きる～』、第8分科会のテーマは、『人として共に育ち合う地域づくり』であった。私は、『いま若者たちがあげている悲鳴に真剣に耳を傾けよう！』とのタイトルで報告をさせて頂いた。現代の『家庭崩壊』に基づく若者たちの担わされている苦しみに、参加者皆さんの理解を得たいと願った。

私は2人の北星高校とビバハウスに関する若者の話をした。16歳の少年は、父親が不在で、母親と妹に暴力を振るうため、母親は耐えられずに、この子を家庭外で面倒を見てもらいたいと全国約30箇所当たったが、すべて断られ、母親から相談を受けたNPO心のケアセンター（静岡県）の依頼をビバが受け入れて、昨年8月23日からビバで生活し、この4月から北星余市高校の新入生になった。然し、下宿生活での対人関係で常にトラブルを起こし、ビバに舞い戻ったりしていたため、2年への進級が不可能になり、休学していた。

そこへ、この夏休み、家には帰れない事情のある生徒をビバで扱ってほしいとの北星高校担任からのたつての要請を受け、もう一人17歳の少年を受け入れたところから、この夏の修羅場が始まった。この少年は、幼児期母親から殴る、蹴る、縛るの虐待を受けて育ったと後から聞いた。ビバに指導に来た担任に殴りかかり、ビバ・スタッフの全力の制止で、担任に対する暴力だけは、辛うじて防いだが、翌日学校に殴り込みをかけ、退学処分になった。彼には彼独自の言い分もあったことは後でわかったが、北星高校は退学にしたが、実家にも帰れず、行き場のない彼をビバハウスは放置することは出来なかった。

分科会の最後に、私の報告に対し、複数の若い保育者から、『なぜそこまで若者たちに取り組まれるのですか？』との質問を受けた。私は、「北星余市高校の教師集団が創設期に共同で確認した、『生徒たちは、未来の日本社会を作る我々の同労者』だから。」と応えた。